

養護教諭の年代による生徒対応の視点の違いを探る

1. 設定理由

近年の社会環境や家庭環境の変化は、子どもたちの心身の健康にも大きな影響を与えており、子どもたちが抱える健康問題は複雑化し、保健室来室理由も多様化している。このような状況の中、市内中学校22校のうち20校の養護教諭が一人で勤務しており、日頃から職務の不安を同職種にすぐに相談できる環境ではなく、他校の養護教諭がどのような視点で保健室に来室する生徒に対応（以下、「生徒対応」とする）しているのかを学べる機会は少ない。特に、20代の養護教諭は、経験も浅いため、日々不安を感じながら執務にあたっているのが現状である。

そこで、20代の抱える不安は他年代にも共通するのか、また、生徒対応における視点は年代によって違いが見られるのか、事例検討会を実施しその結果を分析した。その結果から、各年代の生徒対応における視点やその特徴がわかれば、どの年代の養護教諭にとっても、日頃の対応を振り返り、自己の資質向上に向けて、足りない部分を補う研修に参加する等、具体的な対策が取れるのではないかと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

年代別事例検討会を通して、養護教諭の年代における生徒対応の視点の違いを探ることにより、日頃の対応や判断を行う上での具体的な課題が明らかになるのではないかと考え、本主題を設定した。

3. 研究内容

- (1) 市内中学校養護教諭の事例検討会参加経験の調査
- (2) 市内中学校養護教諭の年代別事例検討会実施
- (3) 市内中学校養護教諭の事例検討会結果の年代別分析

4. 結論

年代によって生徒対応の視点や、課題解決に向けた対応策に違いがあることがわかった。

40代、50代の養護教諭の多面的な視点や対応策は、経験だけでなく、他職種で構成された事例検討会に継続的に参加する等、積極的に自己研修にとりくんでいることも要因であると思われた。今後は、どの年代であっても、養護教諭として適切な生徒対応ができるよう、個々が積極的に研修にとりくむことはもちろん、市原市中学校養護教諭部会としても、情報交換会や事例検討会を定期的の実施する等、一層の実践力向上に努めていく必要がある。

養護教諭の年代による生徒対応の視点の違いを探る

I 設定理由

近年の社会環境や家庭環境の変化は、子どもたちの心身の健康にも大きな影響を与えており、保健室でも、傷病者の応急手当だけでなく、健康相談や保健室登校生徒の対応等、メンタルヘルスへの個別対応が増えている。

また、2015年12月中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」で示されたように、養護教諭はチーム学校の一員として、専門的な知識や技能を生かし、学校内外の職員と連携し、健康課題や心の問題、時には生徒指導的な問題を抱える生徒の対応にあたる、コーディネーターとしての役割も期待されている。

しかし、市内中学校の22校中20校の養護教諭が一人で勤務しており、日頃から職務の不安を同職種にすぐに相談できる環境ではない。特に、経験の浅い養護教諭は、初任者研修、5年目経験者研修、フォローアップ研修等で行う事例検討会で、抱えている事例を検討してもらう機会もあるが、メンバーが同年代のことが多く、他年代の養護教諭がどのような視点で生徒対応にあたっているのかを学べる機会は少ない。

そこで、20代の養護教諭が抱える生徒対応への不安は、他年代にも共通するものなのか、また、年代によって生徒対応の視点に特徴的な違いがみられるのかを知るため、市内中学校養護教諭を年代ごとにグループ分けし、20代の養護教諭が抱える事例について事例検討会を行い、結果を分析した。

各年代の生徒対応における視点やその特徴がわかれば、20代の養護教諭だけでなく、どの年代の養護教諭にとっても、自己の資質向上に向けて、足りない部分を補う研修に参加する等、具体的にとりくむことができ、実践力の向上につながるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究仮説

年代別事例検討会を通して、養護教諭の年代における生徒対応の視点の違いを探ることにより、日頃の対応や判断を行う上での具体的な課題が明らかになるのではないかと考え、本主題を設定した。

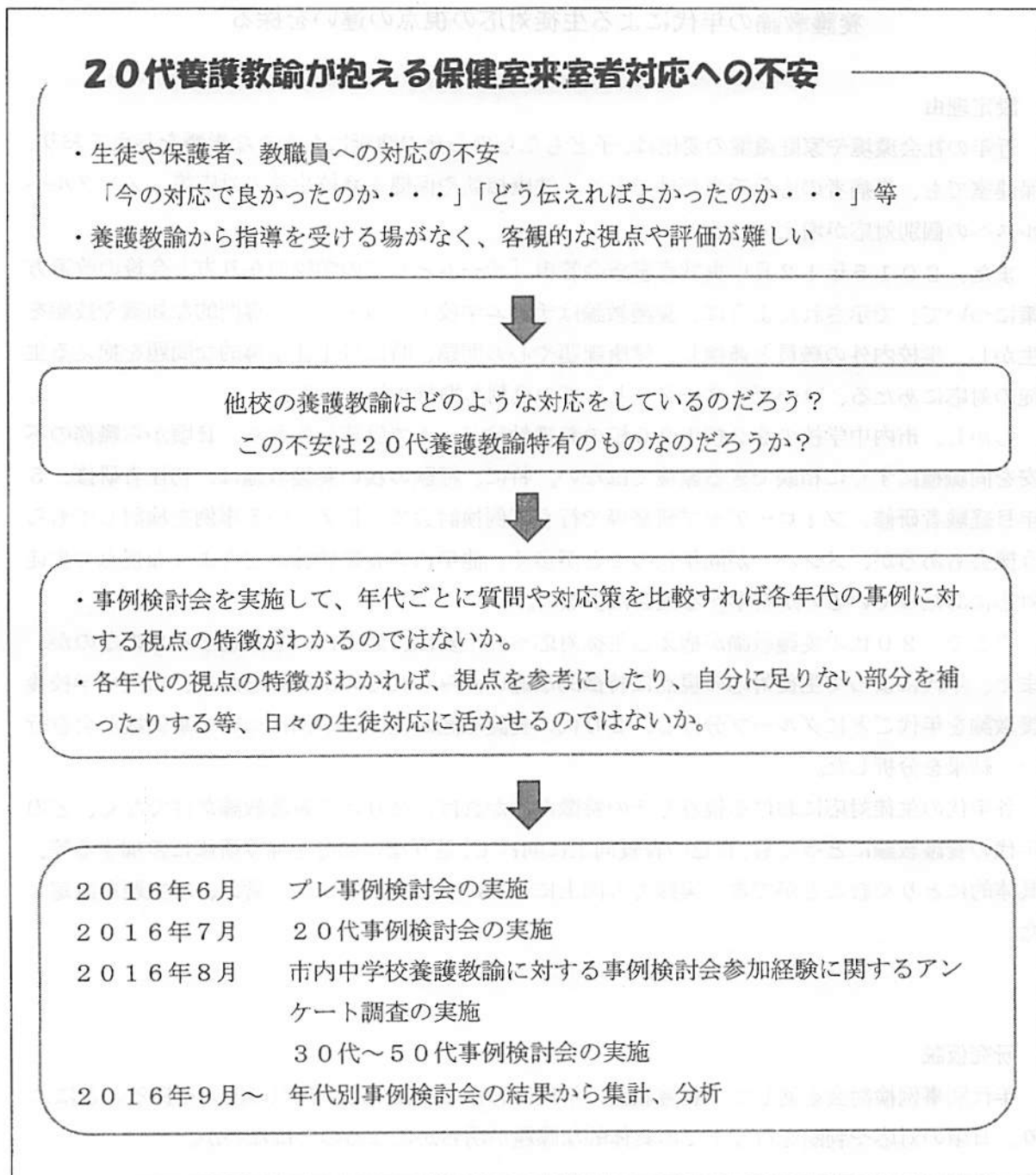
III 研究の経過

2015年度 研究テーマと内容の検討、研究計画書の作成

- 2016年度 (1)市内中学校養護教諭によるブレ事例検討会実施
(2)市内中学校養護教諭に対するアンケート調査実施
(3)市内中学校養護教諭による事例検討会実施
(4)事例検討会結果の集計と分析

2017年度 研究のまとめと今後の課題検討

IV 研究全体図



【図1】研究全体図

V 研究内容・結果

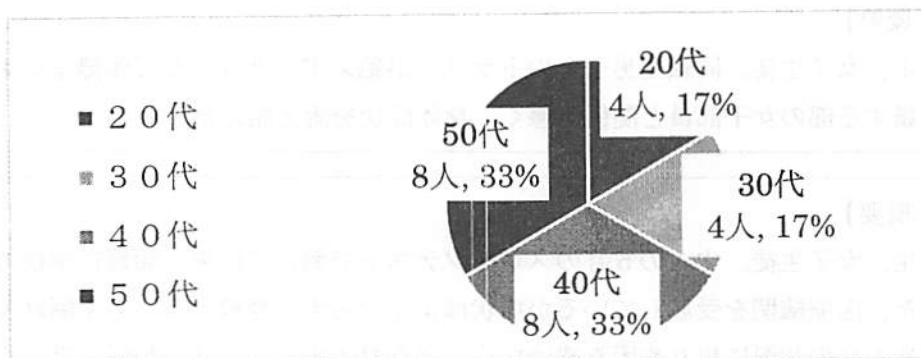
1. 市内中学校養護教諭の事例検討会参加経験の調査

市内中学校養護教諭の年齢構成や事例検討会への参加状況等を調査した。

- (1)対象 市内中学校養護教諭(24人)
- (2)方法 2016年8月 アンケート調査実施
- (3)内容 ① 年齢・経験年数 ② 校外での事例検討会参加状況
③ 養護教諭以外との事例検討会参加状況

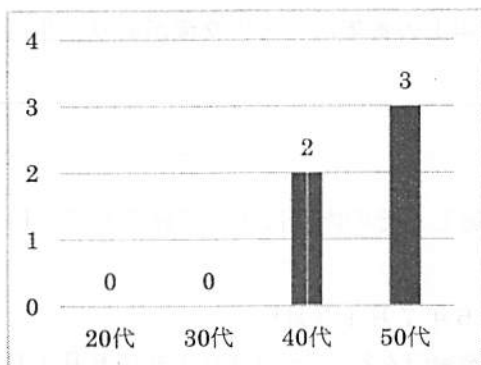
(4)結果

① 年代の割合

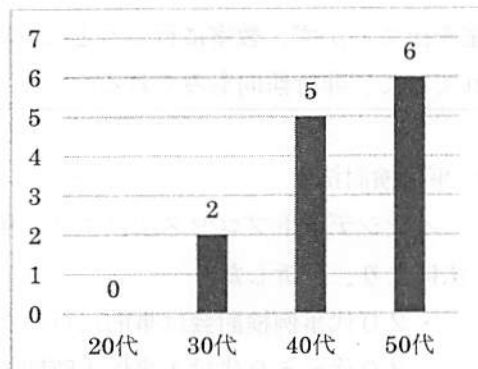


【図2】市内中学校養護教諭の年齢構成

② 校外事例検討会の形態について



【図3】校外継続事例検討会参加経験者数



【図4】養護教諭以外の事例検討会参加経験者数

調査の結果、20代養護教諭は校外での継続事例検討会へ参加している者はいなかった。一方で30代は養護教諭以外との事例検討会への参加、40代、50代は継続的かつ養護教諭以外で構成された事例検討会へ参加経験のある者が多いことがわかった。

2. 市内中学校養護教諭の年代別事例検討会実施

20代養護教諭が悩んでいる事例を、他年代はどのような視点でとらえ、どのような対応策を考えるのかを探るため、年代別の事例検討会を実施した。

(1)対象 市内中学校養護教諭(24人)

(2)方法 インシデントプロセス法による事例検討会

※インシデントプロセス法とは

インシデント(実際に起こった出来事)をもとに、参加者が事例提供者に質問することで出来事の背景や原因となる情報を収集し、問題解決の方策を考えていくもの。

① グループ分け

20代(4人)、30代(4人)、40代(8人)、50代(8人)の4グループ

② 事例

20代養護教諭3人より各1事例提供

【事例A概要】

中学1年生、女子生徒。同級生男子とのトラブルが絶えず、ケガをして保健室へ来室する。また、所属する部の女子部員と関係が悪く、身体症状を訴え始めた。

【事例B概要】

中学2年生、女子生徒。中1の5月のスポーツテストで倒れて以来、頻繁に学校で倒れるようになった。医療機関を受診しているが症状はよくなり、登校すると必ず倒れてしまう。本人も家族も今の状況に焦りや困り感はなく、どう対応するのが良いか悩んでいる。

【事例C概要】

中学2年生、女子生徒。教室に居場所がなく、保健室への来室が多い。授業中に来室しては、保健室を出ていかず、教室に行こうとしない。また、年上の青年たちとの交流があり、生活が乱れていて、非行傾向もみられる。

③ 事例検討法

インシデントプロセス法により、年代別に実施し、その内容はすべて録音して、KJ法により、分析した。

- ・20代事例検討会は事前に行った。(2016年7月13日)
- ・30代～50代は1事例1時間で3つの事例検討を行った。(2016年8月1日)

(3)事例検討会の流れ

- ① 司会より事例検討会の説明
- ② 事例提供者より事例を簡潔に説明
(すべてのグループに対して同じ内容の説明になるようあらかじめ原稿を準備した)
- ③ 各自事例に対する「質問」を黒色ボールペンで付箋に書き込む
- ④ 質疑応答(その場で思いついた質問も付箋に書き込む)
- ⑤ 各自事例に対する「対応策」を赤色ボールペンで付箋に書き込む
- ⑥ 「質問」「対応策」の付箋をグループごとにKJ法で分類する
- ⑦ 感想の記入

3. 市内中学校養護教諭の事例検討会結果の年代別分析

事例検討会で得られたデータをKJ法の手法を用い、エクセルを使って分類、集計を行い、年代ごとに比較して、各年代の特徴を探った。その後、3つの事例の特徴を比較するため、再度見出しを「学校」「養護教諭」「家庭」「本人」「友人」「外部機関」の6つに分類し、分析した。

(1)方法

- ① 事例検討会で出た「質問」「対応策」について全年代合わせたKJ法を行う
- ② KJ法によりグループ分けを行い、見出しをつける

- ③ 各事例で年代別に各見出しの値を出し、集計しグラフ化する
- ④ 各事例の年代別特徴をまとめる…**結果Ⅰ 結果Ⅱ**
- ⑤ 各事例共通の年代別特徴を比較する…**結果Ⅲ**
- ⑥ 事例検討会を終えての感想…**結果Ⅳ**

(2)結果

① 結果Ⅰ 【3事例別年代の特徴】

〈表1〉事例A (質問・対応策)

質問	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・「外部機関」への質問がない。 ・「本人」への質問が多い。「本人」に焦点を当てている。 ・「家庭」への質問で、家族との関係性について触れていない。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」「友人」への質問が多い。 ・「友人」への質問で、事例に関係している友人以外の友人関係についての質問が多い。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への質問がない。 ・「本人」への質問で、学習面や性格面等、特徴について焦点を当てている。 ・「家庭」への質問で、DVへの可能性を質問している。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭」への質問で、DVへの可能性を質問している。 ・「養護教諭」への質問数が他年代より多く、また質問の内容が具体的である。 ・各見出しで見たとき、重なる質問が少なく、色々な情報を取り入れている。
対応策	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」への支援策が多い。 ・「養護教諭」への対応策がない。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への対応策で、本人にとって保健室が話しやすい場、癒やしの場であり続けるために環境づくりという対応策が、30代のみ見られた。 ・「養護教諭」への対応策で、30代のみ養護教諭個人で行う対応策が出た。 ・「友人」に対しての質問が多く見られたが、対応策はない。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」への対応策で、受容もあるが、指導とトレーニングの意見が多い。 ・「本人」への対応策で、具体的な指導の仕方が出ている。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への対応策で、他の教職員と連携するという意見が他年代より多い。 ・「本人」への対応策で、受容しつつ指導を行っている。 ・「本人」への対応策で、内科的要因については、病院での受診を勧める等本人の主訴を把握し、養護教諭として伝えるべきことを伝えている。

〈表2〉事例B (質問・対応策)

質問	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への質問で、他年代では見られた組織体制に関する質問がない。 ・「本人」に焦点を当てている。 ・「家庭」への質問は、他年代では見られた家族関係や家庭環境についての質問がない。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への質問で、特別支援学校への検討やスクールカウンセラーとのカウン

		<p>セリング等、本人が一番良い環境で学校生活を送れるよう、現在の状態を考えての質問がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「本人」への質問で、保健室や学校でわかること（普段の健康状態や健康診断での結果など）から、本人の健康状態のことについて聞いている。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・見出しごとに見たとき、他年代に比べて質問数が多い。 ・「家庭」への質問で、家族関係や家庭環境についての質問が細かい。 ・「本人」への質問で、倒れる前の状況について聞く質問が多い。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」という組織でどのように対応するか、また問題解決の優先順位を確認し、手立てを考えようとする質問がある。 ・50代のみ「養護教諭」への質問がある。
対応策	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」「家庭」への対応策で、他の教職員、保護者への積極的な働きかけが少ない。 ・「学校」「家庭」への対応策で、理想的対応策が多く見られた。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への対応策で、30代のみ細かく記録しておくべき内容が記されている。 ・「友人」への対応策は、30代のみ出てきた。 ・「外部機関」への対応策は、他年代と比べて、医療機関しかない。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」より「学校」への対応策が多いのは40代のみである。 ・「学校」への対応策で、組織的対応での具体策が出ている。 ・「本人」へ対応策で、身体的症状に関する本人への具体的指導が多い。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への対応策で、ケース会議というキーワードが50代のみ見られた。 ・「養護教諭」への対応策で、来室記録を残すだけでなく、再度養護教諭自身が本人の分析を行うことが対応策で出た。

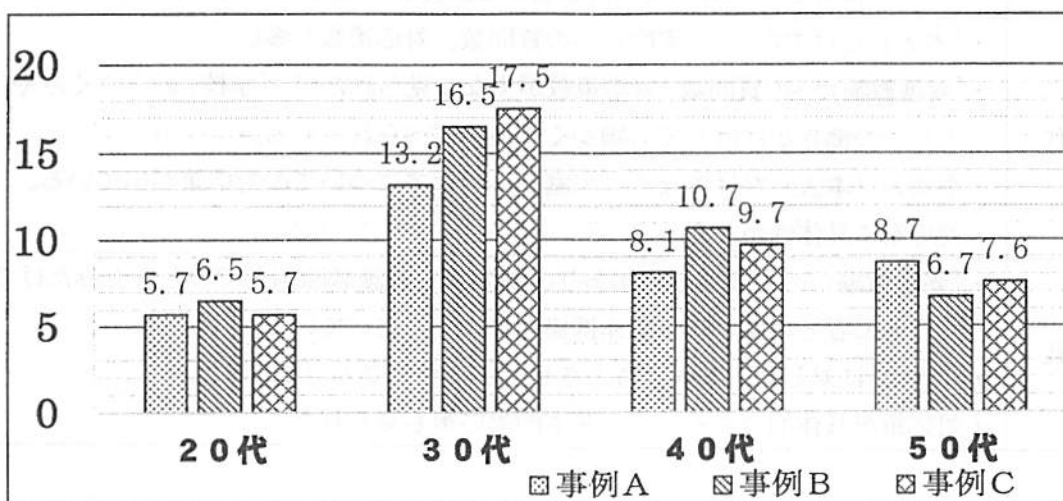
〈表3〉事例C（質問・対応策）

質問	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への質問で、学校に足が向いていないとのことから、本人の悩みを聞いてくれる教諭が誰なのかを見つけようとしている。 ・「家庭」への質問で、他年代では見られた経済面についての質問がない。 ・「本人」への質問で、他年代では見られた容姿や性格についての質問がない。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への質問で、来室時間や理由についての理由は多いが、養護教諭との関係性についての質問がない。 ・「本人」への質問で、他年代と比べて多く、非行関係の質問が多い。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「家庭」への質問で、祖母や保護者と本人との関係性についての質問が多い。 ・「本人」への質問で、学校へ足を向かせるために、本人が好きなことや頑張れること等についての質問が多い。 ・「本人」への質問で、本人が身近な大人のことをどう思っているのか心理を探る質問がある。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への質問で、授業担当者というキーワードが50代のみ見られた。 ・「養護教諭」への質問で、養護教諭との関係性についての質問が見られた。

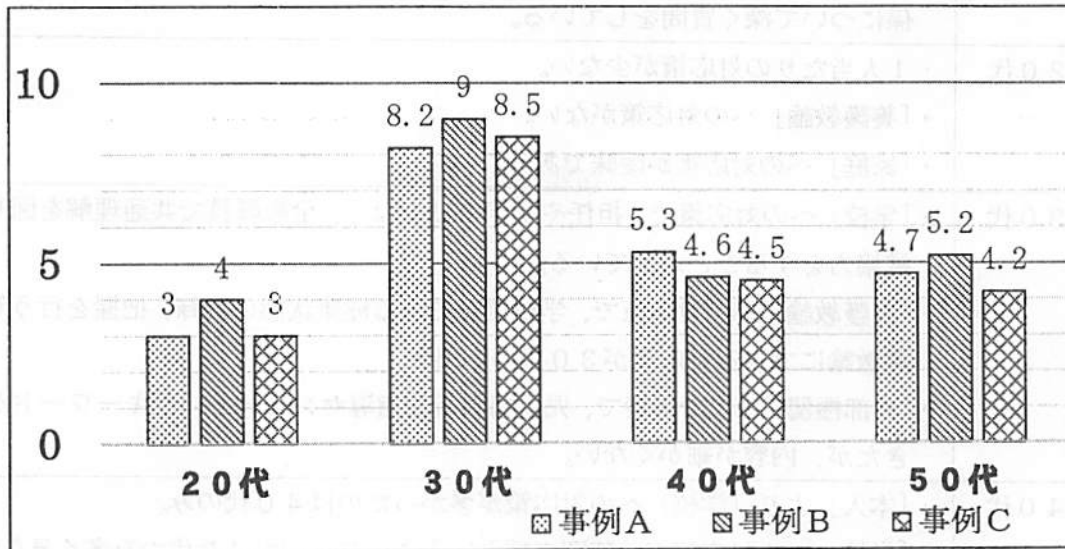
		<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」への質問で、異性関係、非行関係についての質問が多い。特に、異性関係について深く質問をしている。
対応策	20代	<ul style="list-style-type: none"> ・1人当たりの対応策が少ない。 ・「養護教諭」への対応策がない。 ・「家庭」への対応策が曖昧である。
	30代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への対応策で、担任や学年だけでなく、全教職員で共通理解を図り、連携協力をする事が出ている。 ・「養護教諭」への対応策で、学校側ができる健康状態の記録、把握を行う等、養護教諭にできる対応策が30代のみ出た。 ・「外部機関」への対応策で、児童相談所や指導センターというキーワードが出てきたが、内容が細かくない。
	40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」より「学校」への対応策が多かったのは40代のみ。 ・「学校」への対応策で、特別支援というキーワードが40代のみ多く見られた。 ・「家庭」への対応策で、祖母を中心とした対応策が出ており、祖母のケアに関する事も出た。 ・「外部機関」への対応策で、詳しい手立てがいくつか出ている。
	50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校」への対応策で、居場所づくりや受け入れ態勢等、本人が学校にいられる環境づくりという提案が多く見られた。 ・「学校」への対応策で、情報共有、共通理解、連携協力だけでなく、教職員がどのようにこの事例を考え、取り組むのかを改めて考え直すことを提案している。 ・「養護教諭」への対応策で、50代のみ養護教諭の取り組みとして、学年教職員と本人とを繋げる役目が出た。 ・「本人」への対応策で、質問でも多く見られた、異性関係や性教育についての対応策が見られた。

② 結果Ⅱ

【3事例の年代別の質問数・対応策数の比較】



【図5】3事例の年代別の質問数(1人あたり)



【図6】 3事例の年代別の対応策数(1人あたり)

3事例の年代別の質問数【図5】、対応策数【図6】ともに、20代が一番少なく、30代が一番多いことがわかった。

③ 結果Ⅲ

【3事例共通の年代の特徴の比較】

20代	<ul style="list-style-type: none"> ・他年代より1人あたりの質問数、対応策数が少ない。 ・「本人」に対しての対応策は受容することに焦点を当てている。 ・生徒が小学校ではどうだったのかの視点が欠けている。 ・「養護教諭」への質問数、対応策数が少ない。 ・「学校」に対しての働きかけが少なく、具体性がない。
30代	<ul style="list-style-type: none"> ・他年代より1人あたりの質問数、対応策数が多い。 ・「養護教諭」が個人でできる記録という取り組みが対応策として出ている。 ・「本人」に対しての対応策は指導もあるが受容することに焦点を当てている。
40代	<ul style="list-style-type: none"> ・「本人」だけでなく、「家庭」への質問数、対応策数が多い。 ・「養護教諭」への質問数、対応策数が少なく見られたが、「学校」のとりくみや「本人」への働きかけはとても細かく、多く述べられている。 ・事例の「本人」だけでなく「家庭」へのケアについての対応策が出ている。 ・対応策に具体性がある。
50代	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護教諭」への質問が必ずあり、対応策も養護教諭個人でのとりくみだけでなく、他の者との関わり方や連携協力について述べている。 ・「本人」に対して、本人に考えさせるという手立てが見られた。 ・対応策が具体的である。また基本的対応策も見られた。

④ 結果 IV

【年代別事例検討会の感想】

- ・事例検討をして新しい視点に気付けた（20代）
- ・KJ法によって事例の問題点がなにか考え直すことができた（20代）
- ・事例検討会を実施することで、自分の考えが整理され、対応策が明確になった（30代）
- ・他の先生方の意見、考えを聞いて自分にはない視点や方法があることを学べた（40代）
- ・問題を抱えた生徒の家庭環境や担任、顧問等、周りに目が行きがちであるが、20代のように目の前にいる生徒をしっかり見ていくことも、大切だと改めて気付かされた（50代）

(3) 考察

年代別に見ると20代は他年代と比べて明らかに質問数【図5】、対応策数【図6】が少ないことがわかった。また、40代から50代は、どの事例においても1つの質問に対し深く追求しているが、20代から30代は1つの質問に対し深く追求はせず、情報を集めようと色々な方向へ話をしたため、内容の統一性が見られなかった。

次に質問、対応策の内容を年代別に見ると、それぞれ次のような視点の違いが見られた。20代はどの事例に対しても質問、対応策ともに内容が単発的かつ簡易的なものが多く、「本人」に焦点を当てていて、生徒に寄り添うという気持ちが強い反面、視野の狭さが伺えた。30代はどの年代よりも1人あたりの質問数、対応策数が一番多く、様々な可能性を考慮し、保健室来室記録や環境作り、身体測定の結果を活用する等、養護教諭の職務の特性を生かした対応策が多く見られた。また、「本人」「友人」に関する質問、対応策が、他年代よりも多く見られ、仲間関係から、問題を理解し、対応策を考えようとする傾向が強いのではないかと思われた。40代、50代は質問、対応策が細かく記されていた。さらに40代では、「家庭」への質問数、対応策が多く「家庭」へのケアについても述べていることから、学校だけでなく家庭との連携協力も重視していることがわかった。50代は、養護教諭だけでのとりくみだけでなく、他の者との関わり方や連携協力について具体的に対応策として述べられていることから、コーディネーターとしての養護教諭の役割をよく理解し、実践していることが伺えた。

以上のように、各年代によって生徒対応の視点に特徴がみられることがわかった。また、20代の養護教諭の課題として、視野の狭さや、コーディネーターとして、他の教職員等と連携を図るといった視点が不十分であることが示唆された。

さらに、事例検討会後の感想から、保健室での生徒対応に関して、振り返りの場がなく、客観的な視点や評価が難しいということは、20代だけではなく、どの年代にも共通する課題であると考えられた。

VI まとめと今後の課題

本研究は、事例検討会を通して、年代による生徒対応の視点の違いを探り、日頃の対応や判断を行う上での具体的な課題を明らかにすることを目的として行い、次のような結果が得られた。

- ・年代が上がるほど、事例検討会への参加経験が多いことがわかった
- ・年代別事例検討会の結果、各年代によって、生徒対応の視点に特徴がみられることがわかった
- ・年代別事例検討会の結果、20代は他年代と比較して、視野が狭いことが伺えた

- ・年代別事例検討会の結果、年代が上がるほど、連携を重視し、組織的な対応を考える傾向がみられた
- ・年代別事例検討会は、どの年代のにとっても、生徒対応における新たな視点に気づく機会になることがわかった

保健室に来室した生徒に対し、養護教諭が、どのような視点で生徒の訴えを捉え、どのような対応が必要と判断するかは、その後の支援の方向性を決める上でとても重要である。今回事例を提供した20代の養護教諭も、来室時の主訴が、けがや病気であっても、その背景に、家庭環境や友人関係の問題があるのではないかという視点で捉えているからこそ、その対応について「この対応策が最良なのか?」「他にできることはないか?」という思いを抱き、不安を感じていたのではないかと思われた。よりよい生徒対応のためには、本研究で明らかになった、各年代の生徒対応における視点の特徴をふまえ、自分に足りない視点に気づき、幅広い視点や対応をしていくことが大切である。

40代、50代の養護教諭の多面的な視点や対応策は、経験だけでなく、養護教諭以外で構成された事例検討会に継続的に参加する等、積極的に自己研修に取り組んでいることも要因であると思われた。

今後は、どの年代であっても、養護教諭として適切な生徒対応ができるよう、個々が積極的に研修にとりくみことはもちろん、市原市中学校養護教諭部会としても、情報交換会や事例検討会を定期的実施する等、一層の実践力向上に努めていきたい。

<参考文献>

- ・『教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引き』
文部科学省
- ・『新版 養護教諭の行う健康相談』
東山書房
- ・『悩みへの対処が養護教諭の心理・行動的変容に与える影響』
関泰子
- ・『養護教諭の職務意識に関する調査研究—校種・学校規模・経験年数による差異』
久保昌子・森下正康
- ・『養護教諭の職務実態と自己評価—職業的自立性を求めて』
小笹典子・臼井永男・高崎祐治
- ・『養護教諭が辛い体験を乗り越えていくプロセス研究仲間とのアクション・リサーチを通して』
清水優子・土橋紀久子・宮田順子
- ・『学校不適応を示す生徒に対する養護教諭の連携行動』
蛭田美咲・物部博文
- ・『悩んでいる教職員の発見とその支援の在り方に関する研究「教職員悩み尺度」の開発を通して』
藤井義久